



Title	胸管の病理組織学的研究（白血病を中心として）
Author(s)	宇多, 弘次
Citation	大阪大学, 1960, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/28318
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	宇 多 弘 次
	う だ ひろ つぐ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	第 138 号
学位授与の日付	昭 和 35 年 11 月 4 日
学位授与の要件	医 学 研 究 科 病 理 系 学位規則第5条第1項該当
学 位 論 文 題 目	胸 管 の 病 理 組 織 学 的 研 究 (白血病を中心として) (主 査) (副 査)
論 文 審 査 委 員	教 授 岡 野 錦 弥 教 授 宮 地 徹 教 授 小 浜 基 次

論 文 内 容 の 要 旨

目 的

体液循環路に於ける胸管の位置は極めて重要であるに係らず、その病理学的検索は内外を問わず不充分であって、今日に至るも尚盲点となっていた事は否めない。一方近時、白血病が腫瘍であるという概念はもはや動かし難い定説であるが、私は腫瘍細胞としての白血病細胞の血液内侵入、即ち白血病なるものを一つの症候と見なしこれに対してリンパ流への侵入状態を調べて血液の変化との関連を考察し、従来種々の混乱のあった造血臓器の腫瘍の分類に対し、その病理学的性格を比較検討して解釈上の困難解決に幾分とも寄与せんとして、各種白血病及び悪性リンパ腺腫、悪性腫瘍、その他の疾患の胸管を routine に検した。

症 例

本学の病理学教室等で行った病理解剖体100例の胸管を取出し、H.E染色、マロリーアザン染色を施して、組織標本での細胞学的組織学的変化を検索した。

白血病例19, 内, リンパ性白血肉腫を含むリンパ性白血病5, 急性骨髓性白血病5, 慢性骨髓性2, 単球性白血病3, 緑色腫性白血病2, 慢性赤白血病1, 急性赤血病1

悪性リンパ腺腫12, 内, リンパ肉腫6, ホジキン氏病3, 細網肉腫3,

再生不良性貧血1, 汎骨髄労1, 無顆粒球症1, 類白血病反応2, 紫斑病1

各種癌24, その他の悪性腫瘍9,

上記以外の疾患30, 計100例である。

結 果

白血病及び悪性リンパ腺腫に於ける胸管内にみられるのは殆んど凡て腫瘍性性格の細胞であり、大小の凝固塊として認められる部もある。血栓は新しいものから既に器質化したものもある。血栓は出血性素因の

あるものに認められ、後腹膜、腸間膜両リンパ腺の出血に起因する。胸管の内皮細胞の剝離によって来る血栓も考えられる。胸管周囲組織や胸管附属のリンパ腺の白血病浸潤から胸管が浸潤されて管壁の弾性線維筋線維の間を内腔の方へ腫瘍細胞が破壊侵入し遂には全く胸管を腫瘍化せしめる。又白血病、悪性リンパ腺腫の両者に本質的な差は認められない。その他赤白血病細胞、ホジキン氏細胞、巨核球等を胸管内に初めて認めた。

悪性腫瘍の際胸管では上皮性腫瘍に特に変化が強く殊に後腹膜臓器原発のもの及後腹膜に転移を来したものが更に胸部臓器及びウイルヒョウ氏腺への転移の際、胸管を中心とした一つの転移系を進み、胸管自身にも白血病にみられたと同様の変化を示して来ることがわかった。その他の疾患で死亡した症例を集めて胸管内リンパ球の絶対数を概算し又その百分比を行って見ると、細胞数は6,300乃至928,500でリンパ球は60乃至97%好中球1乃至28%単球0乃至8%その他である。この数値は決して絶対的正確度は示さないが、各種疾患の細胞成分の数的変動が個人差を凌駕すると思はれるものがある。事実これによって肝疾患に於ける胸管内リンパ球の絶対量増加がみられたが、今後の例数を追加したい。

結 論

胸管の病理組織学的精査を初めて、routineに行い、在来の白血病その他疾患に於ける推測的な諸説に對し鍵点となると思へる諸事実を立証した。

(1) 各種白血病19例の胸管には常に腫瘍細胞が血栓をなして存在し遂に狭窄乃至閉塞に至るものがある。又周囲組織及びリンパ腺の白血病浸潤によって胸管が浸潤破壊される事がある。

(2) リンパ肉腫の中には血液にこそ著明な変化を来さないにもかかわらず、白血病と區別出来ない所見を示すことがある。

(3) (1)(2)により白血病に於けるリンパ流の役割が血流に於けると同等の重要性を示すものとする。

(4) 悪性の上皮性腫瘍の内、胸管内に腫瘍細胞を認める例は原発部位の如何を問はず、大部分が後腹膜に腫瘍増殖のあることを実証した。

(5) 血液性疾患の多くは胸管内にも出血を認める。

(6) 腹腔臓器の炎症の際に胸管を介して炎症細胞が移動し胸管内に膿血栓を造るに至るものがある。

(7) 間質炎性変化のある肝硬変及び肝炎では胸管内にも異常の淋巴球増多をみたものがある。

論文の審査結果の要旨

体液循環路に於ける胸管の位置は極めて重要であるに係らず、その病理学的検索は内外を問わず不充分で文献的にも数える程しか見られず、それも殆んど癌の転移に関するものである。又白血病の本態が全身の造血臓器の系統的増生であるという考えは過去に於て圧倒的であったが現今では諸種の観点からもはや悪性腫瘍として理解するのに何等の疑念をもはさまないのが大勢である。而しこれが癌肉腫同様単元的発生を行って全身に拡大転移するという観点の下に、人体解剖例の病理組織学的検索を試みた研究は極めて少く、且又それをリンパ流を主として行ったものはその着眼すらない。著者は白血病に於ける全身臓器に於ける広汎な浸潤は決して血液への白血病細胞の流入によるのみの現象でなく、リンパ流リンパ管への流入がその重要な要因であることに着目して中枢リンパの輸送幹管たる胸管を中心に末梢各臓器リンパ道の白

血病細胞の浸潤を観察した。白血病19例及び悪性リンパ腺腫12例と並び癌を含む悪性腫瘍33例、血液疾患6例、その他、事故死を含む他疾患30例の胸管を病理解剖で略全長採取し連続切片を作成して、腫瘍細胞、異常細胞の見落しを可能な限り防止した。

その結果胸管に於ては白血病悪性リンパ腺腫共本質的に異なる腫瘍性侵襲を示し一部のものでは壁の腫瘍置換や血栓による栓塞及び閉塞等の所見を得た。又この病態は癌及び一部の肉腫に於ても浸潤様式の機構に於て全く異なることを認めた。更に他臓器のリンパ道に於ても多数の白血病細胞が流入浸潤して胸管内所見と概ね並行し、組織学上で白血病浸潤として認められるのは主としてこの経路の浸潤によるものである事を認めた。

更に炎症性疾患や類白血病反応に於ける胸管内細胞所見が調べられ、血液疾患では多く出血のあることが実証された。

又連続切片によって胸管内細胞数を求めて比較値ではあるが、間質的炎症を伴う肝炎、肝硬変で胸管リンパのリンパ球数が異常に増加することを認めた。

以上本研究は白血病の侵襲は血液にのみ起るのではなく、むしろリンパ道を経路としての病変拡大が本質的に重要であることを示し、白血病の臓器組織の変化はこの機構が主因であることが癌等と同等であることを提唱するものである。而し更に動物実験を加えた系統的検索によって理論を進めるべきであろう。